

千葉県南房総市三芳方言



千葉県方言区画図

【千葉県の方言区画】千葉県は利根川を県境として北に茨城県と接し、江戸川を県境として西に埼玉県と東京都に接する。東は太平洋、西は東京湾に面している。北から順に下総、上総、安房の三つの地方に分かれる。1875年まで利根川の両岸が下総であった。外部からの人口の流入に関しては、17世紀からの房総半島沿岸には関西からの出漁のほか、20世紀になってからの工場進出、東京のベッドタウン化によるものがある。2017年7月1日時点の人口は、6,254,216人である。

現在は茨城県となっている利根川北岸には、千葉県内と同様にノダ文の述部に「ノ」が現れない地域がある。経験者格助詞「ガニ」および与格助詞「ゲ(一)」(南房総市三芳方言では「ゲャー」)は千葉県全域で用いられているだけでなく、茨城県南部でも用いられている。千葉県全域に見られる方言特徴としては、前述の格助詞や「ノ」が現れないノダ文の述部のほか、推量の「べ／べ」が用いられることが挙げられる。

佐々木(1997)は千葉県の方言を3区分しており、それぞれを安房・上総方言、下総東部方言、下総西

部方言と呼んでいる。下総では/g/の音価が[ŋ]の地域が多く、上総と安房では[g]の地域が多い。安房・上総方言には/k/の脱落により、「書く」がカウもしくはカーになる地域がある。

【南房総市三芳方言について】本稿で取り上げる方言は、南房総市三芳(みよし)地区の方言である。佐々木の分類では安房・上総方言に含まれることになる。この地域は内陸部にあり、南房総市内の沿岸部とは異なる方言の特徴が見られる。沿岸部では、共通語の/ai/が[e:]に対応するが([ne:]「ない」)、南房総市三芳方言では[ɛ̃a:]に対応する([nɛ̃a:]「ない」)。

安房の他の地域の方言でも見られる特徴だが、一人称代名詞、二人称代名詞、疑問代名詞(人)が主格・所有格のガの前に来る際に独立性のないo-(オガ)、wa-(ワガ)、da-(ダガ)になる(樋口2005)。

音素目録は共通語のそれと同じだが、音配列論的制限には違いがある。共通語では、外来語を除き、促音の後ろに来ることができる要素は無声阻害音だけである。一方、南房総市三芳方言では、促音の後ろに有声阻害音(オッダ「俺たち」)や/r/ (オッラ「俺たち」)、接近音(聞こえてつよ [増間]「聞こえているよ」)が来る場合がある。

【表記について】文献から引用する例文では原点の表記に従う。ただし、ルビは丸カッコで示す。カタカナ表記で注意すべき点は、ゲャ、ネャ、テャが[gɛ̃a]、[nɛ̃a]、[tɛ̃a]に対応し、1モーラの長さである点である。これらに長音記号(ー)が付いた場合は2モーラの長さがあるものとする。音素表記では母音とRの連続により長母音を表すことにする。

【調査概要】本稿の記述は、南房総市三芳地区で生育した1950年生まれの話者への聞き取り調査で得たデータに基づくものである。カタカナ書きの用例は調査協力者から筆者が調査で得たものである。それ以外の例は『方言で語る増間の昔話』([増間]と略記)からの引用である。この文献のデータの共通語訳は同書にある共通語訳を採用した。

千葉県南房総市三芳方言の活用表

《動詞》

		多段型 書く	一段型 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カー	ミル	クル	シル
	断定過去	ケャータ	ミタ	キタ キター	シタ シター
	回想過去	ケャータッタ	ミタッタ	キタッタ	シタッタ
	命令	カエ	ミロ	コー	シロ
	禁止	カーナ	ミンナ	クンナ	シンナー
	意志	カーベー	ミベー	クベー	シベー
	推量	カーベー カーダッペ	ミベー ミンダッペ ミッダッペ	クベー クンダッペ クッダッペ	シベー シンダッペ シッダッペ
	否定推量	カーネヤーッペ	ミネヤーッペ	コネヤーッペ	シネヤーッペ
接 続 類	連体非過去	カー	ミル	クル	シル
	連体過去	ケャータ	ミタ	キタ (一)	シタ (一)
	中止	ケャーテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カエバ ケャータラ (バ)	ミレバ ミタラ (バ)	クレバ キタラ (バ)	シレバ シタラ (バ)
	継起	ケャータラ カート	ミタラ ミット	キタラ クット	シタラ シット
派 生 類	否定	カーネヤー	ミネヤー	コネヤー	シネヤー
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	使役	カーセル	ミサセル	コサセル	サセル
	受身	カーレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能	カエル	ミラレル	コラレル	シラレル
	尊敬	カーッサシャル	ミサッサシャル	キサッサシャル	シサッサシャル
	継続	ケャーテル	ミテル	キテル	シテル
	希望	カイテヤー	ミテヤー	キテヤー	シテヤー
	のだ	カーダ	ミンダ ミッダ	クンダ クッダ	シンダ シッダ

多段型動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
(k)/ø	書く kaR	ケヤー-タ	kをiにし、aiを形成し、さらにそれが ċaR となる。
g	繋ぐ cunag・u	ツネヤー-ダー	gをiにし、aiを形成し、さらにそれが ċaR となる。-タが-ダ(一)になる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	tをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダー	nをN(撥音)にする。-タが-ダ(一)になる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダー	bをN(撥音)にする。-タが-ダ(一)になる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダ(一)になる。
r	切る kir・u	キッ-タ	rをQ(促音)にする。
(w)/ø	買う kaR	カッター	音声的に実現しない/wをQ(促音)にする。-タが-タ(一)になる。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生(だ)
終 止 類	断定非過去	アケヤー	シズカダ	ガクセーダ
	断定過去	アケヤーッタ アカーッタ	シズカダッタ	ガクセーダッタ
	推量	アケヤーツペ アカーツペ	シズカダツペ	ガクセーダツペ
	否定推量	アカーネヤーツペ アカーナーツペ	シズカデネヤーツペ	ガクセーデネヤーツペ
接 続 類	連体非過去	アケヤー	シズカナ	《ガクセーノ》 《ガクセーン》
	連体過去	アケヤーッタ アカーッタ	シズカダッタ	ガクセーダッタ
	中止	アカーツテ	シズカデ	ガクセーデ
	仮定	アケヤーバ アケヤーッタラ	シズカダラ シズカナラ	ガクセーダラ ガクセーナラ
派 生 類	否定	アカーネヤー	シズカデネヤー	ガクセーデネヤー
	なる	アカーナル	シズカンナル	ガクセーンナル
	丁寧	(該当形 欠)	(該当形 欠)	(該当形 欠)
	のだ	アケヤーダ	シズカダーダ	ガクセーダーダ

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

規則的な活用型として基幹多段型(以下「多段型」と基幹一段型(以下「一段型」)がある。おおよそ、多段型には a 類(「書く」・「居る」・「死ぬ」類)動詞、

一段型には b 類(「見る」・「起きる」・「開ける」類)動詞が所属する。

多段型の基幹にはア・イ・ウ・エ段の4形、および、音便形がある。ツナグ(つなぐ)の場合、ツナガ-ネヤー(cunag・a-nċaR)、ツナギ-テヤー(cunag・

i-těaR)、ツナグ (cunag・u)、ツナゲ (cunag・e)、ツネヤー-ダ (cuněaR-da) など。また、語幹末子音には、k (カ行)、g (ガ行)、s (サ行)、t (タ行)、n (ナ行)、b (バ行)、m (マ行)、r (ラ行)、w (ワ行) がある。ただし後述するとおり、k と w は音声的には実現しない。多段型に k と w が語幹末に来る動詞を認めるのは、語源および基幹音便形の在り方を考慮したためである。語例は表「多段型動詞の基幹音便形」を参照。

一段型には、ミ-ル (mi-ru)、オキ-ル (oki-ru) など基幹がイ段の動詞と、ネ-ル (ne-ru)、アケ-ル (ake-ru) など基幹がエ段の動詞がある。一段型の動詞は、ミ-ルを例にすると、断定非過去形・連体非過去形はミ-ル (mi-ru)、仮定形はミ-レバ (mi-reba)、受身形・可能形はミ-ラレ (mi-rare) となり、使役形はミ-サセ (mi-sase) となる。共通語では、母音語幹動詞に後接する際に接尾辞の先頭に現れる子音 (いわゆる連結子音) に、r (断定非過去 kak-u, mi-ru, 受身 kak-are, mi-rare)、s (使役 kak-ase, mi-sase)、j (意志 kak-oR, mi-joR) の3種類があるが、三芳方言では r と s の2種類である。意志形が-joR を使わないため、連結子音 j が不要だからである。連結子音として r が用いられることが多い (断定非過去形・連体非過去、仮定形、受身形・可能形)。共通語で連結子音 s が用いられるのは使役形だけだが、三芳方言では使役形 (cunag-ase、mi-sase) と尊敬形 (cunag-aQsjar-u、mi-saQsjar-u) の両方で連結子音 s が用いられる。

不規則な活用をする動詞にクル (来る) とシル (為る) がある。ともに一段型に近い活用をするが、「クル」は、キ-タ (k・i-ta)、ク-ル (k・u-ru)、コー (k・oR) などのように、基幹が「キ」「ク」「コ」の3段にわたる。本資料集の他の稿のように使役形・受身形の「サ」も基幹と見なすならシル (為る) は、サ-レル (s・a-re-ru)、シ-タ (s・i-ta)、シ-ル (s・i-ru) シ-レバ (s・i-reba) などのように、基幹が「サ」「シ」の2段にわたることになる。シル (為る) の基幹がサ、シの2種類である点で、「為る」の一段化が共通語より進んでいると言える。なお、サレルを s-are-ru と分析する場合でも、語幹は s-と si-の2種類を認める必要があるので、「為る」一段化は完了していない。

多段型動詞では、表面上共通語とは異なる基幹音便形が生じる場合がある。共通語では語幹末がk, g/

の動詞の断定・連体過去形と中止形でイ音便が生じる。三芳方言の場合、活用表の「書く」の語形変化からわかるように、断定・連体過去形と中止形の接尾辞の直前に/i/が出現せず、[kěa:ta]、[kěa:te]のような形式になる。「ない」「赤い」のような共通語で/ai/という音連続を含む語形の音声的実現が[něa:]、[akěa:]であることを考えると、[kěa:ta]はイ音便で生じた/ai/が[ěa:]になった結果生じた形式と考えることができる。語幹末の/k/は基幹音便形以外でも表面上出現しない。これは、/kak-u/, /kaka-na-i/, /kak-e/, /kak-i-ta-i/が母音間の/k/の脱落とその前後の母音の間で生じる音韻プロセスにより[kā:], [kaaněa:], [kae], [kaitěa:]となるためである。一段型動詞や「来る」「する」では、母音終わりの語幹の後で使役接尾辞や受動接尾辞が連結子音を持つ異形態で現れる。一方、「書く」の使役形や受動形では連結子音のない異形態が用いられる (/kak-ase-ru/ [ka:seru], /kak-are-ru/ [ka:reru])。語幹末の/k/の存在は、基幹音便形の派生の前提となるイ音便の存在と使役接尾辞と受動接尾辞で連結子音を持つ異形態が用いられないことから間接的にうかがい知ることができる。音便形として生じる/ai/は[ěa:]になるのに対し、希望形 (基幹部分はイ段形。学校文法の連用形に相当) の場合は/ai/は音声的にも[ai]のままである。/ai/の音声的実現の違いは形態法の違いと対応している。音便形が出現する断定・連体過去形と中止形が屈折的形態法であるのに対し、希望形は派生的な形態法である (これは希望形が形容詞的な語形変化をすることから明かである)。

「書く」の場合語幹末子音の直前の母音は/a/であった。他の母音が/k/に先行する場合は、/k/の前後の母音に「書く」の場合とな異なる変化が現れる。以下に、「聞く」と「引く」の代表的な語形を示す。ここでも音便形とイ段形の語形で母音の音価が異なることに留意されたい。「聞く」/kik-/ (断定・連体非過去形: [kju:~], 断定・連体過去形: [ki:ta]、命令形: [kjuē], 否定形: [kjuaněa:]、イ段形: 「聞き返した」[kjuikěa:ejta])、「引く」/hik-/ (断定・連体非過去形: [φu:~], 断定・連体過去形: [φi:ta]、命令形: [φuē], 否定形: [φuaněa:]、イ段形: [φui])。 (形態) 音素標示に/u/が含まれない語形 (例えば命令形/kik-e/ [kjuē]) で[u]が興味深い。

語幹末子音が/g/の多段型動詞は、音便形以外では/g/が[g]として現れるため、語幹末子音が/k/の多段型動詞に比べると語幹の形式は安定している。「つなぐ」/cunag-/（断定・連体非過去形：[tsunagui]、断定・連体過去形：[tsunaida:]、命令形：[tsunage]、否定形：[tsunaganěa:]、イ段形：「つなぎたい」[tsunagitěa:]）。語幹末子音が/g/の多段型動詞でも不規則な語形変化をする動詞もある。「行く」を意味する動詞である。断定・連体非過去形が[iɣui]であり、音便形を除く語形で[g]が出現することから、語幹は/ig-/と考えられるが、音便形ではイ音便ではなく促音便が現れる（「行った」[itta]）。

語幹末子音が/n, m, b/の場合、基幹音便形では共通語と同様に撥音便が生じる。また、音便形に後続する接尾辞の先頭の/l/が有声性の進行同化で[d]になる点も同様である。

語幹末子音が/t, r, w/の場合、基幹音便形では共通語と同様に促音便が生じる。共通語では否定形など基幹がア段となる場合にだけ/w/が出現するが、三芳方言では、否定形（カーネヤー）でも/w/が出現しない。なお、使役形（カーセル）と受動形（カーレル）では接尾辞の前に子音がないにもかかわらず、連結子音異形態が用いられない。語幹末の/w/の存在は音便形と連結子音異形態が用いられないことから間接的にうかがい知ることができる。

(2) 各活用形の特徴

〈断定非過去形〉

動詞の断定非過去形は連体非過去形と同形である。多段型動詞で語幹末子音が/k/と/w/の動詞は、語幹末の子音が削除され母音/a/で終わる形式となるが（「書く」「買う」カー）、他の動詞は/u/で終わる。一段型動詞・「来る」・「する」は、それぞれ、基幹（＝語幹）・「ク」・「シ」に「ル」が後接する。この方言の「する」は、後述する使役形と受動形以外では、一段型動詞と同様の語形変化をする。なお、『方言で語る増間の昔話』には「する」の断定非過去形および連体非過去形がスルになっている箇所もある。

〈断定過去形〉

動詞の断定過去形は連体過去形と同形である。語幹末子音が/s/の動詞以外の多段型動詞は、基幹音便形に過去接尾辞が後接し、一段型動詞は基幹に過去接尾辞が後接する。音便の形式については基幹音便

形の表を参照されたい。語幹末子音が/s/の動詞は基幹イ段形に過去接尾辞が後接する。「来る」「する」は、それぞれ「キ」、「シ」に過去接尾辞が後接する。

過去接尾辞には「ター」「ダー」という長母音を含む異形態がある。これらの異形態が用いられるのは、動詞のアクセントが無核の場合である。有核アクセントの動詞の場合は短母音を含む異形態「タ」「ダ」が用いられる。

・カッター（買った）

・カッタ（飼った、勝った）

ただし、「来る」は有核アクセントの動詞であるにもかかわらず過去形で異形態「ター」が用いられることがある。これは、語幹「キ」が無声化し、おそ下がり（杉藤 1969）により過去接尾辞のアクセントが高くなるためと考えられる。

〈回想過去形〉

動詞の断定過去に「ッタ」を加えた形式である。以下の例に示すように過去の出来事を回想する際に用いられる。形容詞、形容名詞述語、名詞述語にはこの形式がない。

・コドモン コロワ ヨー カワデ アソンダ
ッタ。（子供の頃はよく川で遊んだものだった。）

〈命令形〉

多段型動詞の命令形は基幹エ段形（ツナゲ）をとり、一段型は基幹に「ロ」を付加した形式（ミロ）をとる。多段型動詞で語幹末子音が/k/と/w/の動詞は、語幹末の子音が削除された形式をとる（「書け」「買え」カエ）。「する」はイ段の基幹にロを付加した形をとる（シロ）。「来る」の命令形はコーである。授受動詞「くれる」の命令形には他の一段型と同様のクレロの他にクッドおよびクンドがある。

〈禁止形〉

禁止形は断定非過去形に「ナ」が付く形式である。断定・連体非過去形が「ル」で終わる動詞の場合、活用型の違いにかかわらず、「ル」が撥音になる。共通語では「する」の禁止形で用いられる語幹が「ス」であるが（スルナ）、この方言では「シ」である（シンナ（<シルナ））。断定・連体非過去形末尾の「ル」が促音や撥音になる現象は、助詞や接尾辞が断定・連体非過去形に後接する環境で広く見られる現象である。

〈意志形〉

動詞の意志形は推量形と同形である。多段型動詞では断定・連体非過去形に「べー」が後接する。一方、一段型動詞の場合イ段またはエ段の基幹に「べー」が後接する。「来る」の場合、基幹「ク」に「べー」が後接する。「する」の場合、基幹「シ」に「べー」が後接する。多段型動詞で断定・連体非過去形が「ル」で終わる場合、「ル」が撥音もしくは促音になりその後に「べー」が後接する。

- ・カーベー（書こう）
- ・ツナグベー（つなごう）
- ・ヤンベーーヤッベー（やろう）
- ・ミベー（見よう）
- ・クベー（来よう）
- ・シベー（しよう）

〈推量形〉

推量形は意志形と同形が用いられる他、ノダ形に「ツペ」が後接した形式が用いられる。なお、後述するようにこの方言のノダ形には「ノ」が現れない。

- ・ハグダツペ（はがすだろう）
- ・ミンダツペーミツダツペ（見るだろう）
- ・クンダツペークツダツペ（来るだろう）
- ・シンダツペーシツダツペ（するだろう）

過去推量を表す場合は、シタツペ（しただろう）のように断定・連体過去形に「ツペ」が接続する。

〈否定推量形〉

否定推量は否定形に「ツペ」が後接するかちをとる。否定推量の「マイ／メー」は用いられない。過去の出来事の否定推量は、以下に示すように、否定の過去形に「ツペ」が後続する形をとる。

- ・カーネヤーツタツペ（書かなかっただろう）
- ・ミネヤーツタツペ（見かなかっただろう）
- ・コネヤーツタツペ（来かなかっただろう）
- ・シネヤーツタツペ（しかなかっただろう）

〈連体非過去形〉

動詞の連体非過去形は断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

動詞の連体過去形は断定過去形と同形である。

〈中止形〉

多段型動詞は基幹音便形に、一段型動詞は基幹に、「来る」は「キ」に、「する」は「シ」に接尾辞「テ」が後接する。音便のあり方は断定・連体過去形と同

じである。語幹末子音が/s/の動詞は基幹イ段形に「テ」が後接する。中止形は、節連結のマーカースとして用いられ、複合述語の前部要素の形式として用いられる。

- ・薪（まき）い作（つう）って石臼う買あことんしたあだって。（薪を作って石臼を買うことにしたそうだ。）[増間]
- ・馬はフーフー息いきって、汗えいっペャーけやて、やっとなことで那古さ着（ち）いただって。（馬はフーフー息を切って、汗をたくさんかいて、やっとなことで那古についたそうだ。）[増間]
- ・おが、石臼うしょってやんべえ。（おれが、石臼を背負ってやろう。）[増間]

〈仮定形〉

「(レ)バ」を後接した形式と「タラ」で終わる形式がある。前者は、多段型動詞は「エ段形+バ」、一段型動詞は「基幹+レバ」、「来る」は「ク+レバ」、「する」は「シ+レバ」となる。ただし、以下に引用するように『方言で語る増間の昔話』では「する」の仮定形がスレバになっている例もある。「タラ」で終わる形式は、断定・連体過去形に「ラ」を付加した形式に等しい。「タラ」のあとに「バ」が後接することもある。

- ・人が来たら、あじして合図すればいいかい。（人が来たら、どうやって合図をすればいいのか。）[増間]

〈継起形〉

仮定形で用いられる「タラ」で終わる形式は、従属節の事態が起きると主節の事態が起る継起的連続を表す形式でもある。

- ・クスクス笑い始めたら抑えきれなあなあって、廊下へ出て笑っちゃった。（クスクス笑い始めたら抑えきれなくなって、廊下へ出て笑ってしまった。）[増間]

断定非過去形に「ト」が後接する形式も継起的連続を表す。

- ・姑が帰（けや）っと、今度（こんど）は嫁が出かけて行って、（姑が帰ると、今度は嫁が出かけて行き、）[増間]

〈否定形〉

多段型動詞はア段に、一段型動詞は基幹に、「来る」

は「コ」に、「する」は「シ」に否定接尾辞ネヤーが後接するかたちで否定形を形成する。ただし、多段型動詞でも語幹末子音が/r/の場合は、否定接尾辞の直前の「ラ」が撥音になることがある。否定形自体の活用は形容詞と同じである。

- ・めっかんねゃー（見つからない）[増間]

〈使役形〉

多段型動詞はツナガセルなど基幹ア段形(ツナガ)に「セル」を付し、一段型動詞・「来る」はミサセル、コサセルなど基幹にサセルを付す。「する」はサセルとなる。使役形は一段型動詞に準じた活用をする。以下の例で「手伝わせて」となっている箇所実際の発音は/wが脱落した[tetsuda: sete]である。

- ・弥助は、おきんに手伝わせてそれえ開（ひれゃ）あてみた。（弥助は、おきんに手伝わせてそれを開いてみた、）[増間]

〈受身形〉

多段型動詞はツナガレルなど基幹ア段形(ツナガ)に「レル」を付し、一段型動詞・「来る」はミラレル、コラレルなど基幹に「ラレル」を付す。「する」はサレルとなる。受身形は一段型動詞に準じた活用をする。『方言で語る増間の昔話』の中には「ラレ」が「ラエ」で現れる場合がある。

- ・あんでこんあだ名がつけらえたかっちゅうと、こん男（おとう）はとんでもねゃあ忘れっぴい男（おとう）だったからだ。（どうしてこのあだ名が付けられたかと言うと、この男は非常に忘れっぴい男だったからだ。）[増間]（直接受動）
- ・坊さんは、二人一緒ん来られては困ったことになったと思ったけん、何（なに）食わねゃ一顔ですましていたあだって。（坊さんは、二人一緒に来られては困ったことになったと思ったが、何食わぬ顔ですましていた。）[増間]（間接受動）

〈可能形〉

多段型動詞はツナゲルなど基幹エ段形が可能動詞の基幹となる。一段型動詞は基幹に「ラレ」を後接したものが可能動詞の基幹となる。「来る」・「する」はそれぞれ「コ」・「シ」に「ラレ」を後接したものが可能動詞の基幹となる。可能動詞は一段型動詞に準じた活用をする。

- ・知らねゃーよそん者は、吹いささずにいられな一つたちゅうこっだあ。（知らないよその者は、吹きささずにいられなかったということだ。）[増間]
- ・てんで立てな一なつちゃつたあだ。（全く立てなくなつてしまった）[増間]

〈尊敬形〉

多段型動詞は基幹ア段形に「ッシャル」を後接し尊敬形を形成する。一段動詞は基幹に「サッシャル」を後接し尊敬形を形成する。「来る」・「する」は「キ」・「シ」に「サッシャル」を後接する。

- ・あんでも名主どんがやらっしゃるとおりんやつた一つちゅうこっだあ。（なんでも名主さんがやられる通りにやっていたということだ。）[増間]

尊敬形は語幹末子音が/r/の多段型動詞と同様の活用をするが、命令形のみが不規則な形態をとる。

- ・エラバッシャル（お選びになる）
- ・エラバッシャッタ（お選びになった）
- ・エラバッシャレバ（お選びになれば）
- ・エラバッシャンネヤー（お選びにならない）
- ・エラバッシャリソーダッタ（選びになりそうだった）
- ・エラバッシャー／エラバッシャイ（お選びなさい）

尊敬形の過去形にはヤラッシャッタに対するヤラシッタ（おやりになった）、キサッシャッタに対するキサシッタ（お出でになった）のような短縮形が存在する。

〈継続形〉

継続形には「テル」、「テタ」を用いる。「テ」に先行する形式は多段型動詞の場合、基幹音便形である。一段型動詞では基幹が、「来る」では「キ」が、「する」では「シ」が「テル」、「テタ」に先行する。「テル」および「テタ」は「ている」「ていた」に由来する形式である。とりたて助詞が「テ」に後接する際には、存在動詞「イル」が顕在化する。

- ・ミテル（見ている。）
- ・ミテワ インケン キーテワ イネヤー（見てはいるが聞いてはいない。）

継続形の意味解釈は動詞の意味に依存する。動作動詞と達成動詞では継続形は進行と解釈される。

- ・知らねやーふりいして柿い食ってるもんで、見張りん男は困っちゃった。(知らないふりをして下記を食べているので、見張りの男は困ってしまった。)[増間]
- ・嫁と姑が石臼(いすす)う出して、向けやー合って米ん粉(こな)あ挽いてたあってよ。(嫁と姑が石臼を出して、向かい合って米の粉を挽いていたってよ。)[増間]

到達動詞は、瞬間的な変化を表す場合、継続形が結果状態を表し、瞬間的でない変化を表す場合、結果状態と進行の両方を表す。

- ・トマツテル(止まっている、結果状態)
- ・トケテル(氷が)溶けている、結果状態/進行)

〈希望形〉

希望形の形成には接尾辞「チャー」を用いる。この接尾辞は共通語の「たい」に対応する。多段型動詞と「来る」「する」はイ段形に「チャー」が後接する。一段型動詞では基幹に「チャー」が後接する。「チャー」は形容詞型の活用をする。

- ・うんめやーのが食いてやーって、(うまいのが食べたいと、)[増間]

〈のだ形〉

この方言のノダ文の述部には「ノ」が現れない。断定非過去形あるいは断定過去形に直接コピュラの「ダ」が後接する。断定非過去形が「ル」で終わる場合は、「ル」が撥音もしくは促音になる。この場合後続するコピュラは「ダ」のままである。クツダのように有声の重子音が形成されることがある。断定過去形がコピュラに先行する場合は、過去接尾辞が長母音を含む「ター」「ダー」になる場合と短母音を含む「タ」「ダ」になるばあいがある。過去接尾辞の異形態の条件付けは断定過去形に関して述べたものと同じである。

- ・食うことが出来ただ。(食べることができた)[増間]
- ・出かけることんしたあだ。(出かけることにした)[増間]

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

この方言の形容詞の活用型は1つである。

〈断定非過去形〉

形容詞の非過去形は断定と連体が同形である。「イ」が語幹に後接し、「イ」と先行する母音が融合する(/aka-i/ [akɛ̃a:]「赤い」、/samu-i/ [sami:]「寒い」、/oso-i/ [ose:]「遅い」)。

〈断定過去形〉

形容詞の断定過去形は、断定・連体非過去形に「ッタ」を後接する形式をとる。関東地方の他の地域の方言のように過去接尾辞に先行する部分が形容詞語幹に-kar を付けた形式をとらない点に留意されたい。

- ・石臼(いすす)う買あだけん錢(ぜに)ん持ち合ーせが無一ったもんで、(石臼を買うだけの錢の持ち合わせがなかったので、)[増間]
- ・そんがすげえうめやーったかん、(それがとてもうまかったので、)[増間]

活用表にもあるように「赤い」の過去形はアケヤーッタとアカーッタでゆれている。一方、形容詞語幹が/a/以外で終わる場合は、サミーッターサムーッタ(「寒い」の過去形)、シレーッターシローッタ(「白い」の過去形)のように語形がゆれており、これらすべての語形を/形容詞語幹-kar-ta/から導くことは共時的には困難である。ただし、/a/で終わる形容詞語幹に関しては、/形容詞語幹-kar-ta/が過去形の通時的な起源の一つであることはあり得る。この構造に/k/の脱落が適用され、促音便が起きればアカーッタが得られるからである。/形容詞語幹-i-ta/すなわち断定・連体非過去形に過去接尾辞が後接する構造だけが形容詞の過去形の起源であるならば、アケヤーッターアケーッタという語形のゆれは期待できるが、アケヤーッターアカーッタという語形のゆれは期待できない。

また、動詞の場合と異なり、アクセント核の有無によって過去接尾辞が母音の長短で対立する異形態を持たない。形容詞に後接する際、過去接尾辞の母音は常に短い。

- ・アケヤーッタ(赤かった)
- ・クセヤーッタ(臭かった)

〈推量形〉

形容詞の推量形は、断定・連体非過去形に「ッペ」を後接する形式をとる。茨城県南部の方言のように「ッペ」に先行する部分が形容詞語幹に-kar を付けた形式にはならない。

・そうだ、あん声がいいッペ。(そうだ、あの声がいいだろう。)[増間]

過去の出来事の推量は過去形に「ッペ」を後接した形式で表す。

・ヨーッタッペ/イーッタッペ(良かっただろう)

〈否定推量形〉

否定推量形は、否定形に「ッペ」を後接するかたちをとる。否定推量形にはアカーネヤーッペーアカーネヤーッペという語形の揺れがある。「ネヤー」と「ナー」の揺れは、/a/で語幹が終わる形容詞に見られるものと同じである。過去接尾辞-na は形容詞的に活用する要素である。

〈連体非過去形〉

形容詞の連体非過去形は断定非過去形と同形である。

〈連体過去形〉

形容詞の連体過去形は断定過去形と同形である。

〈中止形〉

中止形は共通語と異なり、語幹の後に「ク」が続かない。/k/の脱落と母音融合により、「長く」はナガー、「良く」はヨー、「欲しく」はホシューと発音され、それに「ッテ」が後接する。

・新しいから柔らかかあっててんでうまいですよ。

(柔らかくてとてもうまいですよ。)[増間]

〈仮定形〉

形容詞の仮定形は断定非過去形に「バ」を後接した形式である。共通語と異なり形容詞語幹に「ケレ」を後接せずに「バ」を後接する点に留意されたい。

・坊さんは頼まねやーば来(こ)ねやーよ。(坊さんは頼まなければ来ないよ。)[増間]

断定非過去形に「ッター」を後接した形式も用いられている。

〈否定形〉

否定形は、中止形の「ッテ」に先行する形に、否定の「ネヤー」を後接するかたちをとる。

- ・アカーネヤー(赤くない)
- ・サムーネヤー(寒くない)
- ・ヒーローネヤー(広くない)
- ・ホシューネヤー(欲しくない)

〈なる形〉

「なる」に先行する形式は中止形の「ッテ」に先

行する形と同形である。また、同じ形は、下の「長あ」(ナガー)のように、一般動詞を修飾する副詞形としても使われる。

・長あ座ることには慣れてる名主どんも、足が痛あなつて、だんだんがまんできななつてきたあかん、そおつと便所へ行くことんしたあだ。(長く座ることには慣れている名主さんも、足が痛くなって、だんだん我慢できなくなってきたから、そつと便所へ行くことにした。)[増間]

〈のだ形〉

動詞の場合と同様、断定非過去形、断定過去形に直接コピュラが付属するかたちをとる。以下の例は、動詞の否定過去形にコピュラが後接した例である。動詞の過去形は形容詞と同様に活用する。

・村中ん旦那達が総出で隣の滝田との境(さけやー)まで探したあけん、判んなあつただ。(村中の旦那達が総出で隣の滝田との境まで探したが、判らなかった。)[増間]

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形〉

形容名詞述語と名詞述語は非過去形で連体と終止の区別がある。断定形はコピュラの「ダ」が形容名詞および名詞に接続する形式をとる。シズカダのようなアクセント核のある形容名詞の場合、コピュラはダという短母音を含む異形態をとり、シンペヤー(心配)のようにアクセント核のない形容名詞の場合コピュラは長い母音を含む異形態をとる(シンペヤーダー)。

〈断定過去形〉

この方言では、共通語と同様、過去形で形容名詞述語と名詞述語が同形になる。過去形ではコピュラは短母音を含む形式しかとらない(シンペヤーダッタ(心配だった)、シズカダッタ(静かだった))。

・そん男(おとう)は犬が大嫌(でやーきれ)やーだつたかん、(その男は犬が大嫌이었다から、)[増間]

〈推量形〉

形容名詞と名詞述語の推量形は、コピュラに「ッペ」が後接した形式である。形容名詞の推量形ではコピュラは短母音を含む形式しかとらない(シンペ

ヤーダッペ(心配だろう)、シズカダッペ(静かだろう))。一方、アクセント核のない名詞述語の場合、長い母音を含むコピュラも推量形で用いられることがあるようである(ガクセーダッペ/ガクセーダーッペ(学生だろう))。

・おめえさんは、増間ん者(もん)だっぺえ。

(お前さんは、増間の者だろう。)[増間]

過去の出来事の推量は過去形に「ッペ」を後接した形式で表す。

・シンペヤーダッタッペ(心配だっただろう)

・シズカダッタッペ(静かだっただろう)

〈否定推量形〉

動詞、形容詞の場合と同様、否定推量形は、否定形に「ッペ」が後接した形式である。

〈連体非過去形〉

連体非過去形は、形容名詞の場合「ナ」が接続し、名詞の場合「ノ」が接続する。形容名詞に後接する「ナ」には「ナー」という長母音を含む異形態が存在する。長母音を含む異形態は先行する要素のアクセントが無核の場合に用いられる。

・シンペヤーナーコト(心配なこと)

・シズカナバシヨ(静かな場所)

〈連体過去形〉

形容名詞述語と名詞述語の連体過去形は断定過去形と同じ形式である。

〈中止形〉

形容名詞と名詞に「デ」が後接した形式が中止形である。

・何(あん)もかんも女房任せで、かかあ天下で家(うち)を切り盛りしてたあだ。(一切女房任せで、かかあ天下で家を切り盛りしていた。)[増間]

〈仮定形〉

この方言の形容名詞述語および名詞述語の仮定形は、形容名詞および名詞に「ダラ」または「ナラ」が後接したかたちをとる。

・馬が、そんなかわいそうだら、自分が下りて、荷物だけつけたらあじょうですかいよ。(馬が、そんなにかわいそうなら、自分が下りて、荷物だけつけたらどうですか。)[増間]

・あたりめやーなら二回で運ぶとろを一回で運んだあもんだかん、(普通なら二回で運ぶ

ところを、一回で運んだものだから。)[増間]

〈否定形〉

形容名詞および名詞に「デ」が後接する形式が否定の要素に先行する。

・モロコシ団子にしてもそれほど珍しい物(もん)でなあったけん、(モロコシ団子にしてもそれほど珍しい物でなかったが。)[増間]

〈なる形〉

形容名詞と名詞にニから転じたンが後接した形式がナルに先行する。

・モロコシの団子を御馳走(ごつつおー)んなった。(モロコシの団子をご馳走になった。)

[増間]

〈のだ形〉

形容名詞述語および名詞述語のノダ形では「ノ」が用いられず、形容名詞および名詞の断定非過去形に直接コピュラが後接する。コピュラが連続する構造になるが、内側のコピュラは先行する要素のアクセントが有核であるか無核であるかに関わりなく長母音を含む異形態が用いられる。

・シンペヤーダーダ(心配なのだ)

・シズカダーダ(静かなのだ)

・ソーユー シューカンダーダ。(そういう習慣なのだ。)

・コンダー オガ バンダーダ。(今度は私の番なのだ。)

用例出典

三芳・方言の会(2011)『方言で語る増間の昔話』三芳・方言の会

参考文献

佐々木英樹(1997)「総論」平山輝男(編)『千葉県のことば』明治書院

杉藤美代子(1969)「『ク・サ』考(アクセントのある無声化母音)」『音声学会会報』132

樋口正規(2005)「房州方言の諸相(3):三芳村定住者の視点から」『ちば:教育と文化』67

(佐々木 冠)